

神経認知障害をもつ高齢患者への情動活性化を目的とする心理劇的方法：重症度に応じた技法上の工夫と有用性に関する研究

北野，祥子

<https://hdl.handle.net/2324/1654612>

出版情報：九州大学，2015，博士（心理学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名 : 北野 祥子

論 文 名 : 神経認知障害をもつ高齢患者への情動活性化を目的とする心理劇的方法
—重症度に応じた工夫と有用性に関する研究—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 約

本研究は、情動活性化を目的とする神経認知障害高齢患者の重症度に応じた心理劇的方法の技法上の工夫について、検討し、その有用性について論じることを目的とした。第1章では、神経認知障害高齢者に対する支援について、看護、介護、臨床心理学の視点からこれまでの研究のレビューを行った。神経認知障害に関する研究は、“本人中心”のケアに焦点が当てられてきているものの本人の内的体験への理解は十分とは言い難い現状がある。そこで、情動活性化を目的とする神経認知障害高齢者に対する心理療法について回想法と心理劇を取り上げこれまでの研究について概観し、効果と課題について整理した。その結果、神経認知障害の重症度に応じた技法上の工夫とその効果ともに内的体験をはかる評価の方法についての検討が課題として示された。

第2章では、軽度～中等度の神経認知障害の高齢患者7名への対人交流をねらいとした心理劇的方法導入グループの事例を取り上げ、行為表現や心理劇的方法を導入する際の工夫や留意点について検討した。事例では7セッションを詳述し、認知的問題や自発性の低下したメンバー同士の対人交流の難しさや自己表現を求められる場面への抵抗を取り上げ、筆者がそれに対して工夫した点について検討した。行為表現や役割演技に対するメンバーの抵抗や防衛的構えに対する工夫として、本事例においては、①行為表現を引き出しやすいテーマ設定を行うこと、②メンバーの語りに耳を傾けること、③メンバーの語りを確認しながらスタッフが率先して身振り手振りを行っていくこと、以上の3つの工夫を行った。その結果、セッション中の様子や観察評価スケール評価点の値から、メンバー同士の対人行動上の顕著な変化が示された。

第3章では、中等度神経認知障害の高齢患者7名へ心理劇的方法を導入し、高齢患者が関心をもち自発性や情動を活性化できるようなテーマ設定や劇展開の工夫について検討した。事例では9回のセッションを詳述した。認知機能低下による自信の喪失や他者とコミュニケーションをうまくとれないことによる否定的感情に配慮し、筆者がそれに対し工夫した点について検討した。①メンバーそれぞれの共通性に着目し、メンバーらのライフイベントに即した心理劇のテーマを設定すること、②役割関係が明確に示されるような劇場面を設定し展開した。その結果、集団への凝集性や入院生活では発揮されにくい自己役割の体験が可能になり、セッションの様子からは、病棟生活や日頃行われているレクリエーションの時には示されないような生き生きとした演技が示された。

第4章では、高度神経認知障害の高齢患者7名へ心理劇的方法を導入し、高度神経認知障害高齢患者が関心を持ち、情動を活性化できるような劇展開の工夫について検討した。事例では13回のセッションを詳述し、認知機能の著しく低下したメンバーの安全感のなさや受動的な姿勢に対して筆者が工夫した点について検討した。本事例においては、①具体的なテーマや共有しやすい場面設定を行うこと、②イメージや身体接触などを取り入れること、以上2つの工夫を行った。その結果、セッションの中の様子や観察評価スケールの評価点の値から、ネガティブな感情表出の減少、イメージの活性化が変化として示された。

以上の研究結果を踏まえ、第5章の総合考察では、今回実施した心理劇的方法導入における重症度

に応じた心理劇的方法の技法上の工夫と、心理劇的方法によって得られた効果を整理した(表 1, 2)。

表 1

	重症度に応じた心理劇的方法の技法上の工夫				シェアリング
	ウォーミングアップ		劇化		
	導入時の配慮	テーマの選び方	補助自我の役割	監督の役割	
軽度神経認知障害高齢患者	抵抗感への配慮 建前の尊重 言語による回想	自然な形で行為表現 につながるテーマ 個人の回想 (~の仕方(How to))	モデリング 気持ちの代弁	小グループ形式 体験との距離の 取りにくさへの配慮 プレイバックシアター	なるべく自由な連想、 感想、疑問のために オープンクエスチョン
中等度神経認知障害高齢患者	退行 直接的な感情表出 できなさへの配慮	役割が明確なテーマ 個人の回想、 共通の思い出	意図を汲んだりード 創造性の保障	展開を推測したりード 劇場面の短さ	焦点を絞った質問 「~はいかがでしたか」 クローズドクエスチョン
高度神経認知障害高齢患者	混乱、不安への配慮 歌やゲーム 身体接触	具体的なエピソードを般化 共有しやすいテーマ、集団 共通の思い出	積極的なりード	具体物の使用 劇場面の短さ	非言語的共有 場の共有化

表 1 に示したように、神経認知障害の重症度によって、心理劇的方法の第 I 相ウォーミングアップ、第 II 相劇化、第 III 相シェアリングのそれぞれにおいて技法上の工夫が必要であることがわかった。

表 2

	重症度に応じた心理劇的方法の効果			
	問題	媒介	特徴的な現象	結果(情動の変化)
軽度神経認知障害高齢患者	無関心 抵抗感	言語 行為 イメージ	新たな役割の取得 他者性(観察性)の促進	他者に感謝する 不遇が自分だけではないと知る 他者に共感する
中等度神経認知障害高齢患者	できないことの多さ 失敗の多さ	行為 イメージ	成功体験 その人らしい役割の再現	楽しさ 嬉しさ 個々人らしさが表現 対人交流の増加
高度神経認知障害高齢患者	強い混乱 適応的でない表出	イメージ	他者とともに居ることの実感 安全感の促進	イメージの活性化 楽しさ 安心感、Beingの保証

表 2 に示したように、神経認知障害の重症度によって、問題となる症状や対人面での課題があり、言語・行為・イメージなど残存している機能を媒介にすることで、それぞれの対人交流や情動の変化が生じることがわかった。

そして最後に、神経認知障害高齢患者に対し、心理劇的方法を用いることの意義として、“表現へと繋がる主体性の支持”と、“表象活動の賦活化”、の 2 点を挙げた。今回心理劇的方法を実施した結果、俯いていたメンバーが顔をあげるようになったり、なにか意図を持って行為表現をしようしたり、言葉を発しようとするなどの場面は増えていった。受動性の強いメンバーがなにか意図をもって自己表現するようになることは大きな治療的意義があるように思われた。また、心理劇には余剰現実という言葉がある。それは心的な現実が拡大され、主役の人生には見えない、触れることができない次元を表現することを意味する。メンバーらにとって演じられる劇自体は非現実的体験であっても、行為を媒介にメンバーやスタッフと体験を積み重ねることは現実での触れ合いである。ある意味、“自分の世界”で生きている認知症高齢者にとって、余剰現実体験を通して現実にと触れ合い、過去を振り返ることは、現実感の得られる体験であるだろうと思われる。

課題として、観察評価スケールの作成や効果評価の方法の検討、量的研究の必要性、日常生活における変化の検討、神経認知障害における詳細な分類による対応や工夫の違いの検討などが挙げられた。